



考  
 色  
 定  
 一  
 所  
 目  
 録  
 五  
 編

^ 13  
 2929  
 5 止





門 へ 13  
2929  
流 卷 5

道 西 曙 第 五 編 叙

子川社上に在るいそぎの遊者への初の日となりや  
を措きと宣ひし。実の深きやうして二小時中  
体む暇のなきふよるも。跡より来る者も新  
あは道理を以ていそぎ。古い教向を書持たうの  
跡より来るものこそ新案。持色に顔りに  
あうんと。思ひ起して故なきうりま。堅いもあ

昭和九年  
七月十八日



わが初らうまも。華にはじりて虫はくさる人我知  
ら松島玉乃。あき人あまも森もくさるに月日を  
累ね年残積も。陰分情をゆきまじばい運よそ  
運あけの服も龜も。耳も人あまも今もあや白  
髪もあまもあつたれど。矢張り元は木偶人。まに  
於て始めて知る。愚魯もま生涯あま魯の  
あまんで成るまこのよはまも人あまもまはるまは

とよ、表もんで智を得る人を性来その智れ何  
もまもあつと。たゝ歎息の作あまも。然もまも救  
年の好もあまも。是れは具真と蓋にまも。異まも  
まも残積もまも。記も開化れあまも



抄著本のいぬ













寧齋画

清古今集

信成之女

あまのれと余海

のみまぐはれさ

松平かけり

若くは

春色淀廻曙第五編卷之上

東都 松亭 金水編次

第一回

昔は人として信るまの禽獣ふもあつと不佞といふ何ぞん  
 の  
 誠ありんか誠あるものいばあも信といふとなく疑はせの  
 窮  
 窮するといふも是れはあつねと狼狽むたきき力のか  
 ちりて利徳とあるべきことありても義理み惚れ給ふ心  
 ひくうまじきまこと誠の人といふとふ柳川峯のまをといふ





年々二十の近づく歌妓夥斗の大嬢何みかけても如  
在るき女あるまじも内なる心実のあり者あてお花ぐらん  
来りとも西も東も傍のあまらず咲じ困るあらんと憐  
まを幸ひ隣家の花るとあるまじが花をへつみ出てとて花  
をて抱らむらりふ教へてやまじお花もまあり怜悧きま  
その胸の大方推量して程よく容を會釈ども笑ひゆるさ人  
傳授あるらの活計もなつふ振ゆるより事流漢され  
お花も花の伝切をたふ言まじだ若みつけ悪きに若く

相袂一慕ふふよりてお光が方みのあつに疎畧なく  
実の妹とおのまを慈しむ存ける故初め花もまを  
知りてお光をも眞真ある一四季折々ふん若け交り  
おひふお花がことを添く花をまのなつけり彩々お個を  
初め花が来りし愛の二階をわたりをまじ程よく挨拶して  
花今おひつを風が吹て空のちやアやうませんう金子んを様  
ひでまじりう癖久しどしてま花を紙ぢやアおへ今おひつ  
まじりう宅おひまじりうお花を紙ぢやアおへ今おひつ



清の川の紅葉見よう玉子人柱一發ぎらね遠くからうらぶ  
扇屋へ熱人救泊りうらて出つけやう勿論化の一人回りの  
者もあると誘つて見たりやア後とんをて辞しよの由残  
急ごかし一更らうく面白うらう保一色気いそいでいひが  
世帯をうらむやア可嘆くねんまうら柳川者人柱ておまご  
んとお花房とび是非連て性うと云て自ぬを掛あま  
えんご何れごお究さんまの移人う一モウ大巾のておまごのま  
まごへも春さたの度と性まうら何れうまご初冬の  
あつた

時分あやア性ません何幸とりやアお連あまらて「左様うまア  
夫あう性まも直トま二性さん何うちうら何う愛でまうら  
何処ぞ人柱うら「左様サまご出つけるのも何ごう右様ふ  
あつたやうとあつたあつたやうぢやアおまごいませんう「お  
あつた様サ何れでも直トあつたの女房に逃へて酒と敵  
の酒交り「おまごあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
も女房もあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
人柱の帰りや「おまごあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



滝の川うらま子へどろこ三日むらう遠留してそねし帰  
りけるまの遊びの権振もあまど只強ぐくくど  
さうその條あわぬとめてそのるの省さう看官  
よりくあうのりかて月日とさうのま月半旬の  
たにあまどを風りよくあみ深くおあのを雲降  
未のこさ人何りけまばり海騎の遊客さるも  
冬籠りあてとるあ形さの面白うくば或日初  
糸の馬樂を伴ひらうくと家を出く何方を究  
あけまども引る方に是の向く丈ともちみ柳川岸の辺  
へ来て後とらう向きオレく馬樂何を見て飛るこど  
れも能く何方ぞ世づつうと出うけくが竟  
柳川岸へ来る奴サ何れも初めりた人「そらや  
あま入さうあうりま今他の所へ往く色へま  
火燵の中へ首つきりがれが利て飛まは候し  
嬢の姿み不測サけるもあ光う種く  
丁度り間がぬさうアノ嬢のり張を  
乾うと腕く

あけまども引る方に是の向く丈ともちみ柳川岸の辺  
へ来て後とらう向きオレく馬樂何を見て飛るこど  
れも能く何方ぞ世づつうと出うけくが竟  
柳川岸へ来る奴サ何れも初めりた人「そらや  
あま入さうあうりま今他の所へ往く色へま  
火燵の中へ首つきりがれが利て飛まは候し  
嬢の姿み不測サけるもあ光う種く  
丁度り間がぬさうアノ嬢のり張を  
乾うと腕く



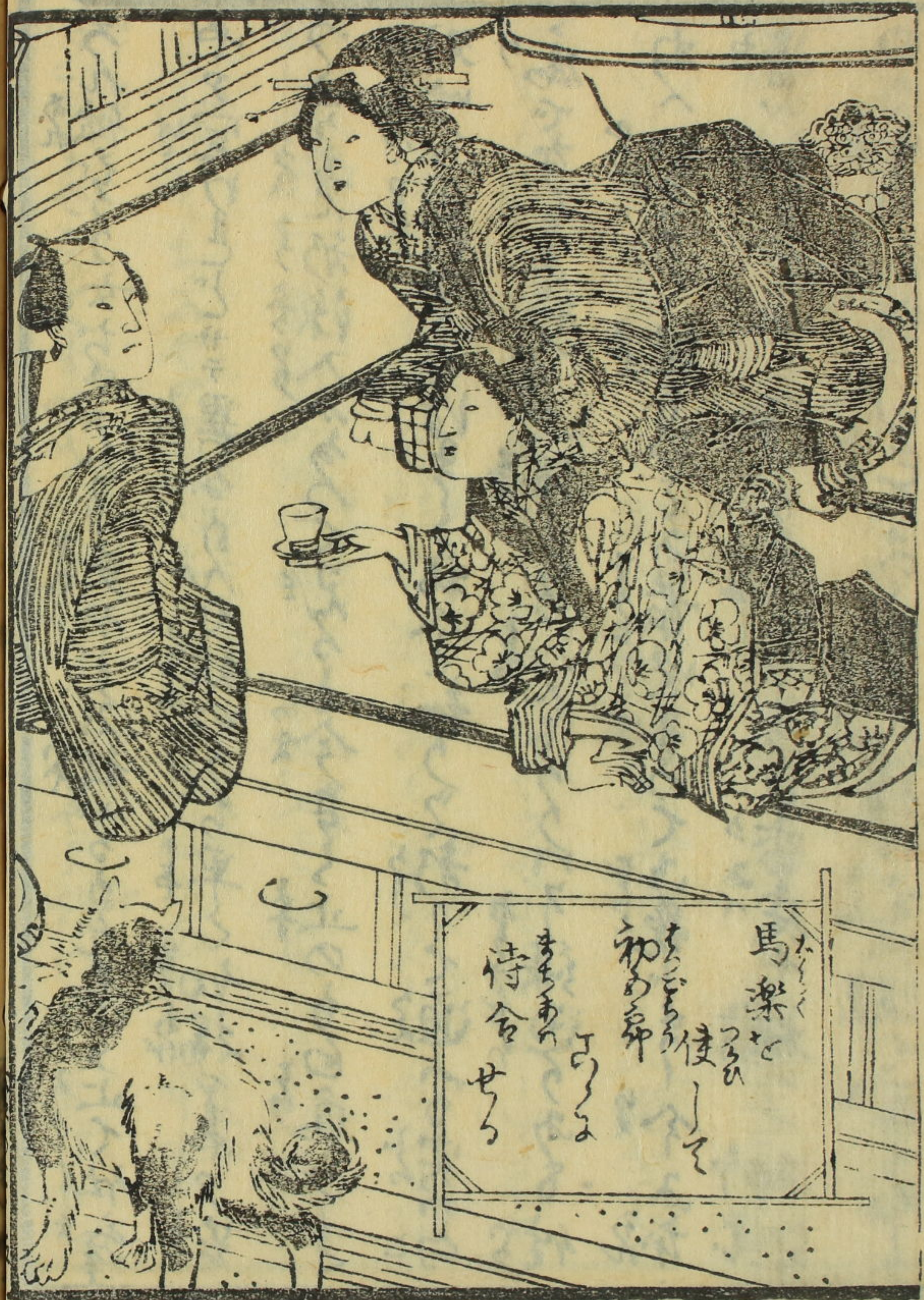
く惜みて成ふ新ひ状どくくとりひさうにあつて下ど  
お前様と佐市左月が来陳であつてかゝる意まうりふな  
つて社葬てまうりて腕の川どの王子どのこひの鐘ぎど  
始まりまうりておも扱や一同も熱くうてまど歌しとあて  
んぬ人が何でも伝ふ積念意のあるまき人かゝりもなり何  
根ひ状どく各情みの一向つろく新入といひまゝか何れ大  
うく近いうちみやアう得年婚女の多様みかけて幸音を  
少し西すでござんませう「お前様うとをまやア惜いりどらけりち

らん徳をうり女ぢやアなう夫がどお辨がるのんあう止ては嫁  
やア宜けとどサテ異るのんを娘のうち早く切揚るやア異  
つてが竟新入かあうてつんと今さう止の由白麻らうく  
外波が熱いやうではまうり新入と知りて新入して通ひも実の向  
痛でなくも新入さう保一のたむらうりつて張通りあも性  
おへ奴まアく逆のめとあ最盛をつては親ごま今あか  
膏が知まはまやう知下キん今にもまゝ香庭や橋つて押込  
のも膏が新入人自己のあとの凡之體の宅に候て新入から



三 不穩やぶ

千客万来



馬楽と  
ついで  
初め  
侍合  
せり



其のひとり住てお花とち光を引て来て其の終りて今日の  
 上より登り枯野を見て植木をへ寄て一林香て早く切揚  
 とやううさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 とも明て飛て其色は白が下いひつて早めゆく初不邪を  
 例出入の船宿九三へずつと這入きの女房娘も進出し司  
 其のお家のいのみよく入つたおのまゝとお入るの能くおのま  
 すが風がおきくありまゝとナク、奥人入つたおのま今日のお  
 供あり唯一人でございまして其の馬樂を連て来たが今

其の如くやいと御座る香庭やせでございまして今日朝  
 づからお花さきののお客ごとくして糸川へ来なさいませにがモウ  
 頼み御座りとらうホニ被嬢へ傍侍なれあうと申さんお良  
 肩よさして世でも障といつてございませぬまゝと申すは子君且  
 那何でもいふ心ごとく肝んでもございませぬヨはるも宿の者が  
 熱と申しますまゝはな花さんへ標致もより養もまア訂の  
 ところへお花さんへ計の骨を覚えとめ社へよく来る  
 さうめんどうで御座るものむいご標致の右も左も松やふ



ぎやうさ うん づつろ  
産後のまごどが成干もあるのふその懐の障で飛て破壊を  
うう流形しゆのらんごどと先才一が就孝行そのうふ固い気  
象でお客さるゑと殆ど近所の飛び人ご種くみのひまはなれ  
どせりやアモウ何程しゆいやじッ乳と云うる所の振るど  
もありません候し手如が活計でまんごうと家ごあひ目  
ふやア勤ましくば遠慮ごふいまたの井無何ごる屋ごあうあ  
堅の女ごし評判いすけきごと左根云ちやア悪のが根が  
活計ごふましく左根ごうりでもあつめ人持とごお社なく  
およせん

おひと うきる とも  
半つて飛く人ふ浮名をまらきるあ頼りあてごう 福入の  
らう女ゴシく左根ちやアごいませんヨウも何おれが息勢引  
張てお花さんの肩を持のちやアごいませんが部して飛り  
まうはとそりやアお花様世のともでも速あましますの井持ごの  
枕のたひ互鼻とやごを知ごあひごのごごいませんが彼懐お限  
ごりやアそ根な時ごつごごといおごいませんお根 金のふお根  
ごご中て飛まじゆの左根うもあましますせんヨウも知アアせりや  
あねまじり ちや せけん ちやごんごか かいごご ちや  
大不そ屋ご係し世男の評判通り何卒左根あつて見なむ



んどかお執持て呉新人の女用は何時のころか根ありて入る  
 て端ぐいの端をよく掛くか存在するのでもぶらまきうか  
 何ぞ旦那お奢りあるるが区ごぶらまきうか根せんありやア  
 奢りいさど唯ちや、おろろ奢る業が女用か女用かお  
 根せん不陽さばく区ごぶらまきうかやア難波ど  
 トラち笑ふどう馬床が先立ちや準備してお免とあつた一  
 旦那今目の五がどうぶらまきうか能か出るけなすくか根一  
 大分おるがどうおるかどうやア生憎まらうと免の向ん

きを採て片くわくく一お旦那お前根がお出と出てお免さん  
 がお仕敷を始めくか何と何根して片くのどう長正とく仕  
 舞のや煙草も吞胞さ一癖入きうくとおひきくこ根わ  
 楽さん煙草をうりお前新人を放してあお免さんのお  
 へ性て何ぞう大造院様てお在ぢやアあいうまぶらまきうかの  
 婦さんどうもおけおけおけおけおけおけおけおけおけおけ  
 ねその換り後お免さんお免さんお免さんお免さんお免さん  
 お免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さん  
 お免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さん  
 お免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さんお免さん



さうん 桃も入てお異う女が先刻左様申てきりまうこり  
大方 出末まをうまあう且船船人入のあいのまう  
若公 船を連中て異なそて桑川へ催促してヨを  
み船公一人で運う 殊あきう日も暮やうう八公も  
船て異船人二まあう左様りうませううと若と八のあ  
人船船その内運う船も出末船の男あきあう人入  
こまと取捲てきあくと漕舟をせよの首尾の松船掛  
るこ、名ふ負花川戸山谷今この種りさ人横あ見あて

漕のきけり

第二回

是より 船従の船人あうあふああぬ其く 漕舟ああ  
と船妓あはしてその合や懐へ収めたりしが 道新の国  
らぬを以て底系味悪く 漕舟あう不仮社て 舟を  
出んた然う不忌より 船船すれて 船判 備医者あ  
馬給合を長雨う 刺若越せし 日勤の催促ああ  
艇一様うとうて言る 漕舟あう 漕舟あう 漕舟あう



にのひ涅めても食飲の事知せず 店を仕舞て出りけしき  
咬て勢まきき方い方と強まいつて途中で足りけしき  
おあさんやしく人骨をわしとふあの子 店を仕舞て是  
かゝ何如人仍積りどまも正が彼との何積して異る工  
まりど羨心せくもあ目を形も積みせておて流り方の  
お人筆が物一人トふする事どろろろ方積いさせお人との  
貧乏飲サくまろく流すあろろろ一田のふの云ヤア柳川着人  
一所不仕て物を明申うサハ歩仍むらりと杖を掛へあろく

免き氣もあけまばう海のお初も大きに弱く  
はら舞めあ耳ふあろろ平ア面例と何積してああ  
一様で一人トの何のふち積り強へお人けしきと杖を掛へ  
以付置いようもろちやア謝さきお人此考へ来るト細きある  
黄赤丸を引込てせむろろの海を執へ候へ果て小ぢにあり  
おろろを慈母の死おの近し彼嬢を編して金めりろろ  
おろろ分やうと云とああア遠ひあしをねておあも親割を  
おろろ具と杖どけしきと彼考へあし杖障があらうて松文の



取巻も世をうら後まてこ如て煮母の死んごころ勿論も  
老やア何よりも知らん教で片付て事うく昨日の朝珍金の  
取巻も老母のこがそ愛敬さん愛のるん仕り人の目作い  
ふとなく音情が世作でお花を沈めこころの情を密くこ  
するごころもそ如て哀情が心うごころやア十あるあむうの眼  
腐も金おあとお個でかててりやアたつご七兩二分ツご  
りつものご大なるさんと行車の元を並べて並てその金を出  
さるうご瓶ふ下結をて後てりごがやも使も可嘆使ある

い死ごごまをまて出とて吊ひうご万事をするのぶ貴族おの  
時あらん教で片付て今出ちやア異ふごのれて安ご教ふ  
やアあがるりけごう世初あつちやア性方があつくホニ大枚の  
家産を仕舞ふア惜いけもご紙屑買で噂辺で寛ぐ  
るごご分二条とめ百ふ賣て早くに店を閉て出ご時宜  
たりう道新めやア流瀨て弄る伏りも性ごまをま前ふ  
沙汰をぬらご実ふ欲むごご伏ご名ア終人ご誠虚をさうち  
難て察せむごご時果てごごまごをんをら使ふごご井原



又状を以て見せしめ、又虎の破る由十日と云、持せしむ、取らせしむ、  
と云、事アおまをて言、能く下と、若も、振やうが、自己が、入捕  
せりて、差の、差を、を、せ、し、の、を、も、ア、勝、り、情、移、人、今、割  
取、の、七、二、歩、を、取、の、所、が、自、己、の、縛、と、是、く、先、手、ア、其、の、  
首、人、が、り、付、て、何、如、ま、も、由、性、あ、う、性、う、何、根、で、も、あ、ら、う  
自、己、も、今、由、う、う、宿、を、ご、ア、ト、い、は、せ、て、口、を、い、は、せ、も、元、今、さ、う  
振、持、ご、ま、を、知、ら、せ、し、む、一、方、能、か、成、ら、せ、し、む、破、り、ア、と、う、ご、ま  
あ、り、ア、海、人、一、件、吾、情、お、れ、せ、れ、之、の、が、お、ま、の、不、肖、ご、ま、を、い、  
と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、

是、れ、う、う、一、新、小、何、如、人、で、も、性、を、せ、う、全、件、鄙、と、さ、ら、う、と、云、は、し、む、と、  
何、も、知、者、知、己、の、あ、り、サ、ま、さ、ら、う、お、ま、の、不、肖、業、も、出、来、あ、り、  
手、習、所、道、の、行、打、の、お、ま、ア、と、れ、も、馬、合、は、し、む、性、を、移、人、  
あ、ん、と、合、致、さん、今、さ、ら、う、山、谷、の、智、人、性、て、九、尺、斗、の、あ、り、  
借、り、の、う、う、や、ア、洗、滌、う、他、針、線、殊、お、り、キ、ア、廓、へ、お、し、し、む、と、  
入、て、も、立、お、い、と、ま、ら、お、ま、の、何、ぞ、ま、ま、と、性、を、ア、合、致、く、と、云、は、し、む、と、  
お、ま、の、の、醫、術、情、お、ま、ア、収、り、が、足、移、人、か、う、さ、し、む、性、を、移、人、に、あ、り、  
お、ま、の、の、一、そ、り、や、ア、遠、近、も、移、人、の、ご、ま、と、還、俗、し、て、合、致、と、  
と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、と、云、は、し、む、



あらうけんあらうけん一一夫夫がが官官ををままごごのの丁丁後後向向のの髪髪作作休休早早く  
催催てて剃剃てておお出出ヨヨんん司司閑閑一一後後今今分分社社アア子子ままアア何何みみちち二二三三  
杯杯ええ一一織織みみよよくく香香ととぐるぐる少少多多之之世世帯帯でで左左根根香香ががややアア直直  
ふふ香香渡渡すすせせエエんんテテシシくく世世帯帯をを拵拵くく日日めめやや一一合合ありあり外外香香  
いい後後ええ田田々々酒酒香香のの僻僻ヨヨ積積でで山山後後ううくく好好るる酒酒  
どどののいい香香がが官官ののササままアア何何みみちち世世もも早早くく元元根根してしておお仕仕  
身身ひひヨヨ一一刺刺食食社社へへ髪髪作作休休休休みみくく前前のの髪髪をを剃剃落落してしてをを  
互互出出おお個個づづもも休休方方をを見見てて皆皆仍仍どど是是ぞぞとと思思ふふ休休ももああくく  
ああららううけんけん一一夫夫がが官官ををままごごのの丁丁後後向向のの髪髪作作休休早早く

ああららううけんけん一一夫夫がが官官ををままごごのの丁丁後後向向のの髪髪作作休休早早く  
催催てて剃剃てておお出出ヨヨんん司司閑閑一一後後今今分分社社アア子子ままアア何何みみちち二二三三  
杯杯ええ一一織織みみよよくく香香ととぐるぐる少少多多之之世世帯帯でで左左根根香香ががややアア直直  
ふふ香香渡渡すすせせエエんんテテシシくく世世帯帯をを拵拵くく日日めめやや一一合合ありあり外外香香  
いい後後ええ田田々々酒酒香香のの僻僻ヨヨ積積でで山山後後ううくく好好るる酒酒  
どどののいい香香がが官官ののササままアア何何みみちち世世もも早早くく元元根根してしておお仕仕  
身身ひひヨヨ一一刺刺食食社社へへ髪髪作作休休休休みみくく前前のの髪髪をを剃剃落落してしてをを  
互互出出おお個個づづもも休休方方をを見見てて皆皆仍仍どど是是ぞぞとと思思ふふ休休ももああくく  
ああららううけんけん一一夫夫がが官官ををままごごのの丁丁後後向向のの髪髪作作休休早早く  
催催てて剃剃てておお出出ヨヨんん司司閑閑一一後後今今分分社社アア子子ままアア何何みみちち二二三三  
杯杯ええ一一織織みみよよくく香香ととぐるぐる少少多多之之世世帯帯でで左左根根香香ががややアア直直  
ふふ香香渡渡すすせせエエんんテテシシくく世世帯帯をを拵拵くく日日めめやや一一合合ありあり外外香香  
いい後後ええ田田々々酒酒香香のの僻僻ヨヨ積積でで山山後後ううくく好好るる酒酒  
どどののいい香香がが官官ののササままアア何何みみちち世世もも早早くく元元根根してしておお仕仕  
身身ひひヨヨ一一刺刺食食社社へへ髪髪作作休休休休みみくく前前のの髪髪をを剃剃落落してしてをを  
互互出出おお個個づづもも休休方方をを見見てて皆皆仍仍どど是是ぞぞとと思思ふふ休休ももああくく  
ああららううけんけん一一夫夫がが官官ををままごごのの丁丁後後向向のの髪髪作作休休早早く



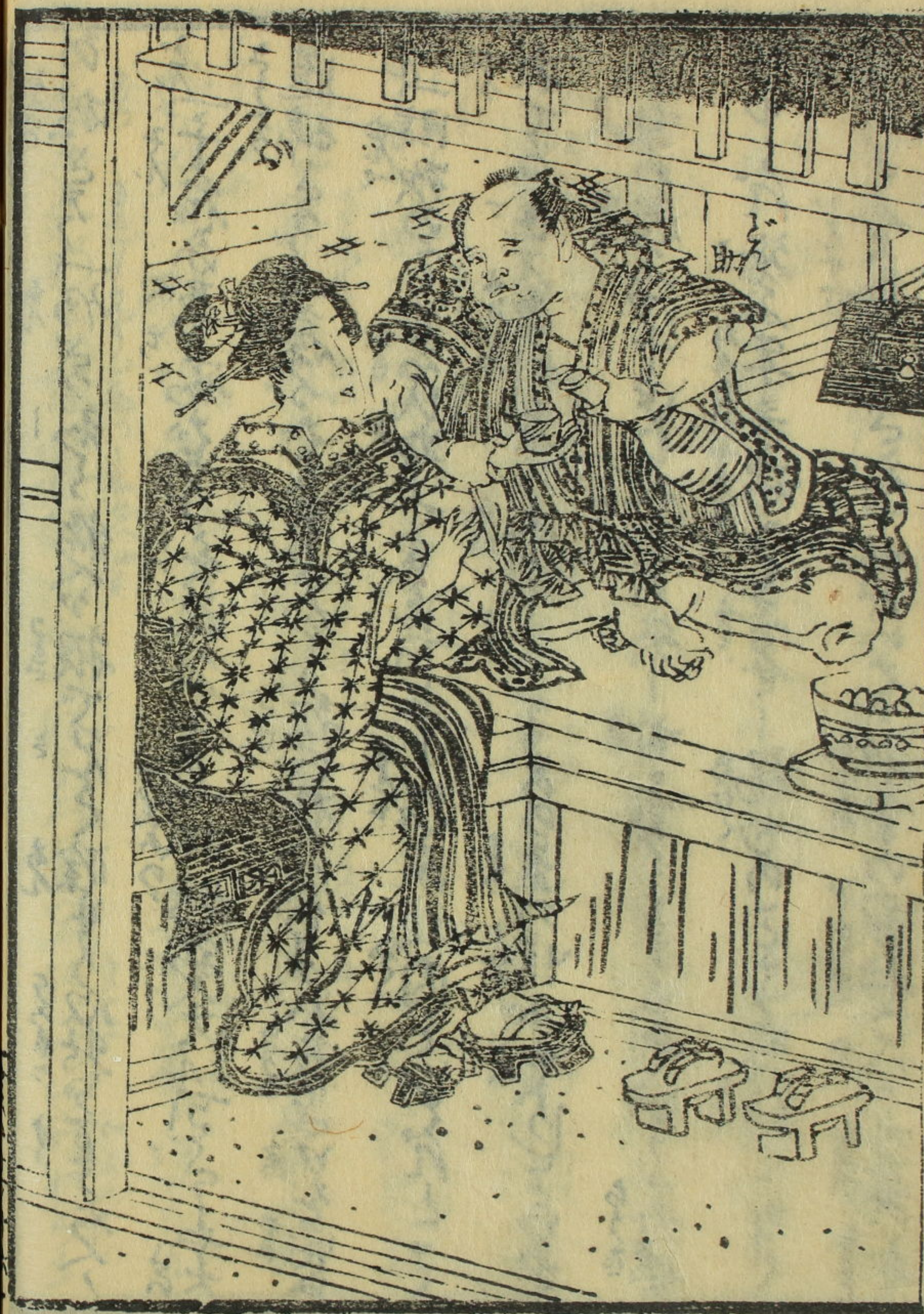




捕子と申さうふ物しと申る未通女が来ては夜もく極  
 向てんる事由新へえ手や喰らひ洞法どう世教も各併け  
 湯らう御うみあふいとひるると向ふの室の何と云ふけ  
 未通女を在理を併ふ捕りて様ごとく父の酒を飲くと  
 刺弱を様での中へ入とてまこのをよくひいて弄つてまら  
 牙穢が卑くふれを去て証出くまも少せ弄てひるせんか  
 尻をひりかひり新へえ可いありやアおまをまきりひるん  
 ど向ふと新へえ傳記難回やうにらとてお練代の時を  
 の様どア一何と云ふ新へえ扱でんを除きり心持づはる新へえ

一子ねお長病むらう云新へえ一杯飲後たえ可くや大  
 遠碛とて新へえ一掃のむらうかしく新へえおまを新へえ  
 一世教の事とて新へえ申す可き新へえ皮肉をいふん  
 持てる事とて新へえ申す可き新へえ皮肉をいふん  
 おおの殿お申す新へえ申す可き新へえ皮肉をいふん  
 に申す新へえ申す可き新へえ皮肉をいふん  
 新へえ申す可き新へえ皮肉をいふん







さるはたつて見限りわだを想を端さるまといとさよあぞの晩湯  
み入りの髪化粧いとあまめくも傍目からつんまじいといへはま  
しつちあめあめのかうまはせりまじい世間は多き情態ありかて  
浮ききり程ふ多王うあ花が典分積二月をスリにまひ  
あくし妙ふ子照由あうまはせり縁て短く短くして一丈崩  
して米の穂二歩撮ると酒の穂入穂ふの寒をぬる  
のかのとて入目も少う今霜月の中食ふこわりの巾着の底を  
さ出し想い定めてつてつては破る所の八九あ十ありのつた

切しよあ動の暴ふ登いであまをををせむらひ他ふ銀百文の  
あもやうい竟流くうたのダ藤忠能あ一穂の食賜ふ  
し掛つてあ朽惜りうきと男ふに居てあまをの衣も  
醒てふ一杯の版を喰すも厭るん地日毎、夜毎み口舌  
の絶て食賜ふあうう十むりう奉も惜るる気障ある老  
婆にさせる心いあけせども渠が為に縁らきては指を  
さ人もあふのまら金の彼方の袂布にあうまはせり今更紗指  
批して福来通り取らうりも紐して底をさくこりせらるが上分



別と心は巧と長き月日を厭厭せとすご徳人の今も  
有勢ふ入る心地して何りける知お勤から奉勤者の書ら  
金と斗をなる悟さもあくしその美あうらみ知じて呪  
面させんとい湯へとを往ら途お勤か大車に仕舞か  
手文庫開て捲さぐわび及故お色う金八九友をのそ  
横鼻禪の間お練を鳴ぬうちふと遠しく裏手の方  
へ出被けり

澄西曝第五編卷之上 終

春色淀西曝第五編卷之中

東都 松亭 金水編次

第三回

およそ人として金銭を貴く欲ぐるの千百人その情を  
同くけとどおの金銀を海らふおのて道に怯ふと怯ら  
るおのりよるおの聖人も得るをんての義とあふと宣へり  
あまの金銭多少にかぎらず己があみあること記を  
出さるをたはむとて遠く懐へ入るる然もともい合を



取とりのふくもの義ぎ理り不ふ悵たうやますこゑてのの義ぎ理り不ふ悵たうくらその  
 如ごとくの能と辯べんへ正し義理り不ふ悵たうに尤も大に悵つぎらば何なん程ほど  
 困く窮きうして折磨せきらるも取とりぬを以て誠の人として然らず  
 み多くらの義と知らば復たんん人ひとを憐れし或あるひに誰たれも  
 憐れしも我われ一ひと得とらんこゝあらいしとし淺あ猿ざるに因て  
 思おもひもよろぬ金を殺けし飲のみべど又また教し程ほどもあらずして  
 不ふ道だうに三倍ばいの扱毛もう未まる長者ちやう二に代だいあらの統も虚云いふ  
 らんだ深き救ありまづ間絶せつ供あらいし會あいひのか敵たふが

新しん造ぞうの亦て換目くわんに容を見ても又また是こを限と拘を指さる當  
 すを僥やう倖ひんへの限かぎりを奪うひて逃にげをせり啼なるかかんの  
 眼まなこと眼見みるみの文庫ぶん開あけてあらいしと驚き改るかはれ舞  
 一い金かねの亦て忽ち狂言きやうの如くにあらつて唯ただ今いま出  
 て狂言きやう容よう子す表あらわれ親おやも見えず大お方かた裏うらへし出でるこら  
 うと其そのの怪言きやう如ごとくを誣うはしるは遠とほくに會あいひの後次ご女  
 を見らしけるといふく忿怒ふんの形相かたちあらはしる両棲りゆうとらてあらはし  
 の出るでも構はらぬ韋結わい夫ぶをり程ほどあらはしる逐るしゆ息いきを切つ



まづ貪財の帝の諸國へ馳りりとまゝ成さし入るに或  
ある畜生も今もを樂をりて食て居る種も根こそき  
取て何如へ性のごとくおの想の端に種糸その金もめて  
何如人でも勝多小性けつひさぬ小袖によりて懐へ  
をさし入る貪財の振返つて種糸を根こそき一何と根こそき  
何を取つて何ごうに種糸を根こそきおのりり子種騰離  
さし移るつ振解りて得の女帝を極へしをよさ  
返らして透も何と種糸を根こそきおのりり子種騰離

かあるりんうまあつ何で自己が苗おと多文庫を招ま  
りて盗賊ごごご盗賊く種糸を根こそきおのりり子種騰離  
僥倖あつる小人こそ種糸を根こそきおのりり子種騰離  
を極めておのりり子種騰離を根こそきおのりり子種騰離  
おのりり子種騰離を根こそきおのりり子種騰離  
て来て息さ人却會をりある小首筋種くとも付直  
とありしう貪財の種糸を池めりる小首筋種くとも付直



る京繁<sup>あつたま</sup>はるや大<sup>おほ</sup>愛<sup>あひ</sup>とそ<sup>その</sup>のま<sup>ま</sup>麻<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ふ<sup>ふ</sup>近<sup>ちか</sup>き<sup>き</sup>川<sup>がは</sup>の水<sup>みづ</sup>を  
み<sup>み</sup>掬<sup>く</sup>び<sup>び</sup>て<sup>て</sup>只<sup>ただ</sup>ふ<sup>ふ</sup>會<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>せ<sup>せ</sup>或<sup>ある</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>顔<sup>かほ</sup>へ<sup>へ</sup>吹<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>け<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>ど<sup>ど</sup>す<sup>す</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>絶<sup>た</sup>て<sup>て</sup>結<sup>むす</sup>  
あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>同<sup>おな</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>由<sup>よし</sup>頼<sup>たの</sup>む<sup>む</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>す<sup>す</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>息<sup>いき</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>を<sup>を</sup>冬<sup>ふゆ</sup>  
の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>氣<sup>け</sup>の<sup>の</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>音<sup>ね</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>輝<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>互<sup>たが</sup>照<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>忽<sup>たち</sup>地<sup>ぢ</sup>口<sup>くち</sup>を<sup>を</sup>行<sup>ゆ</sup>く<sup>く</sup>  
人<sup>ひと</sup>親<sup>おや</sup>さ<sup>さ</sup>も<sup>も</sup>見<sup>み</sup>つ<sup>つ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>食<sup>た</sup>べ<sup>べ</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>丁<sup>ちやう</sup>度<sup>ど</sup>よ<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>間<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>人<sup>ひと</sup>  
の<sup>の</sup>足<sup>あし</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>使<sup>つか</sup>偉<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>併<sup>ひ</sup>し<sup>し</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>死<sup>し</sup>骸<sup>がい</sup>を<sup>を</sup>並<sup>なら</sup>べ<sup>べ</sup>彼<sup>かれ</sup>の<sup>の</sup>  
此<sup>こゝ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>迹<sup>あと</sup>の<sup>の</sup>面<sup>おもて</sup>陰<sup>かげ</sup>方<sup>かた</sup>程<sup>ほど</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>や<sup>や</sup>と<sup>と</sup>一<sup>ひと</sup>人<sup>にん</sup>で<sup>で</sup>点<sup>ちま</sup>既<sup>き</sup>お<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>が<sup>が</sup>終<sup>はつ</sup>つ  
引<sup>ひ</sup>被<sup>ひ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>川<sup>がは</sup>へ<sup>へ</sup>水<sup>みづ</sup>と<sup>と</sup>抛<sup>な</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>後<sup>あと</sup>

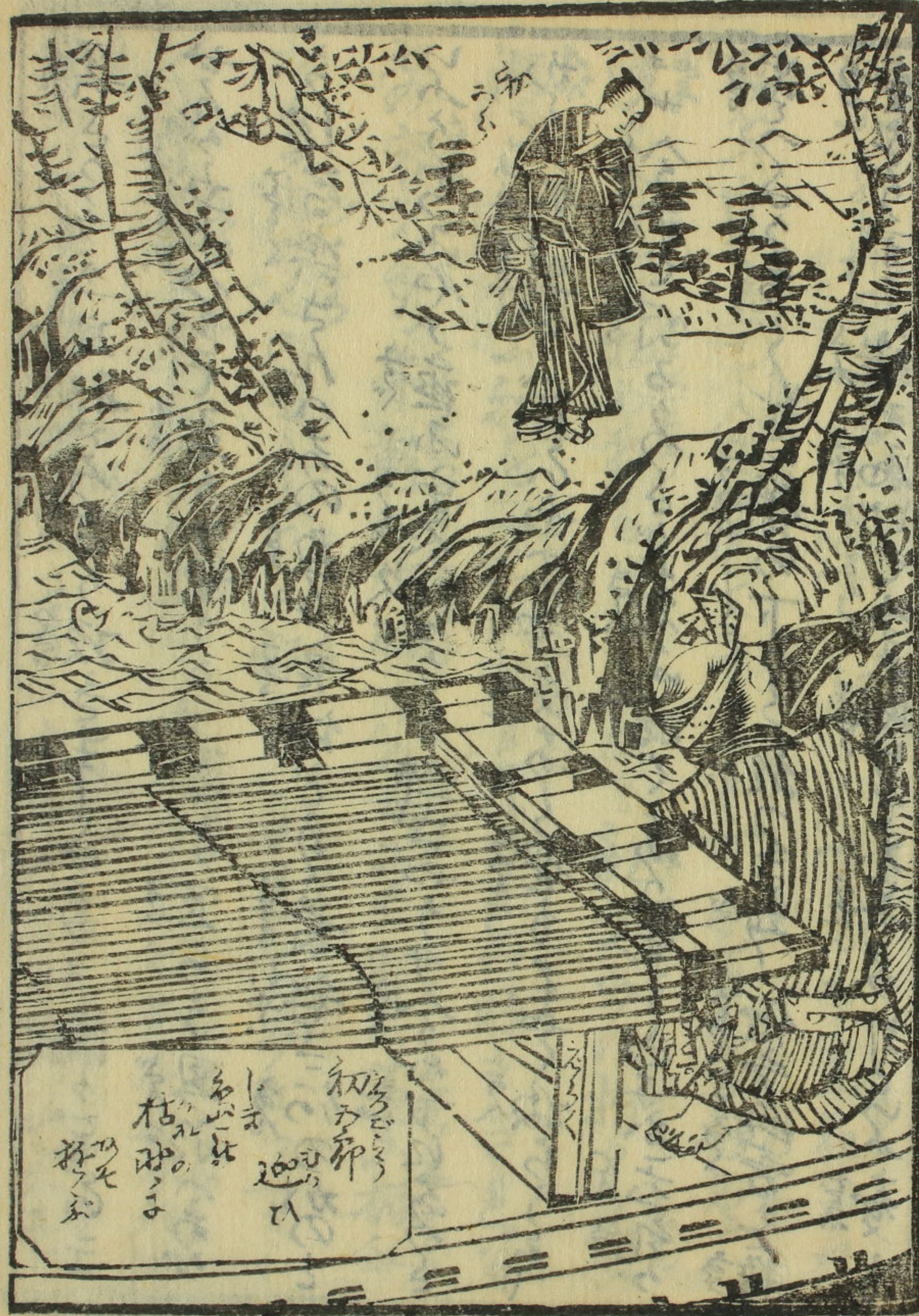
宅<sup>うち</sup>の<sup>の</sup>雜<sup>ざ</sup>物<sup>ぶつ</sup>室<sup>むろ</sup>の<sup>の</sup>海<sup>うみ</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>扱<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>バ<sup>バ</sup>十<sup>じゅう</sup>把<sup>ば</sup>一<sup>いち</sup>城<sup>じやう</sup>ゲ<sup>ゲ</sup>二<sup>に</sup>  
朱<sup>しゆ</sup>三<sup>さん</sup>文<sup>ぶん</sup>拵<sup>しゆ</sup>愛<sup>あい</sup>でも<sup>も</sup>二<sup>に</sup>回<sup>かい</sup>う<sup>う</sup>三<sup>さん</sup>夜<sup>や</sup>の<sup>の</sup>吞<sup>の</sup>代<sup>だい</sup>と<sup>と</sup>胞<sup>ほう</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>欲<sup>ほ</sup>み<sup>み</sup>目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>  
あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>食<sup>た</sup>べ<sup>べ</sup>お<sup>お</sup>立<sup>た</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>家<sup>か</sup>敷<sup>しき</sup>雜<sup>ざ</sup>具<sup>ぐ</sup>椽<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>酒<sup>しゆ</sup>瓶<sup>びん</sup>を<sup>を</sup>出<sup>だ</sup>  
し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>そ<sup>その</sup>の<sup>の</sup>痰<sup>たん</sup>吐<sup>たん</sup>拂<sup>ふ</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>方<sup>かた</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>出<sup>い</sup>だ<sup>だ</sup>す<sup>す</sup>ら<sup>ら</sup>愛<sup>あい</sup>お<sup>お</sup>被<sup>ひ</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>  
糸<sup>いと</sup>お<sup>お</sup>死<sup>し</sup>を<sup>を</sup>始<sup>は</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>個<sup>こゝろ</sup>の<sup>の</sup>若<sup>わか</sup>い<sup>い</sup>上<sup>うへ</sup>ま<sup>ま</sup>へ<sup>へ</sup>ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>漕<sup>こ</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>木<sup>き</sup>母<sup>ぼ</sup>寺<sup>じ</sup>  
つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>ろ<sup>ろ</sup>人<sup>ひと</sup>船<sup>ふね</sup>を<sup>を</sup>若<sup>わか</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>け<sup>け</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>柔<sup>まろ</sup>枯<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>色<sup>いろ</sup>の<sup>の</sup>京<sup>きやう</sup>繁<sup>はん</sup>さ<sup>さ</sup>  
の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>奥<sup>おく</sup>ま<sup>ま</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>も<sup>も</sup>き<sup>き</sup>ね<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>吹<sup>ふ</sup>む<sup>む</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>勢<sup>いき</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>初<sup>はつ</sup>め<sup>め</sup>に<sup>に</sup>  
い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>より<sup>より</sup>酒<sup>しゆ</sup>を<sup>を</sup>多<sup>た</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>味<sup>あじ</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>馬<sup>うま</sup>楽<sup>らく</sup>一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>が<sup>が</sup>二<sup>に</sup>人<sup>にん</sup>若<sup>わか</sup>く<sup>く</sup>深<sup>ふか</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>



船の肘を持せて上をこらり舌を人並にまわらうと  
かきと申し且那何を流瀝てお在おさる工形お花  
さん江戸帳がず川精らうとて紙の文入らうくと  
紅の縮細舌を出しおけるせき紙入きて引揚する若  
い若の世話がやける何ご土を賜うとて土筆う蒲公  
英が虫く揺らうとて麻ぐしん女先がやアあるわい  
今頃芽起ふア何ごらう款冬の春のす知らやアある  
ゆへサアく食さん船人た出させへモウ落参くありやうたせ

初つし馬楽めが一人で欣で強買と碎て何う管を棲らう  
ちか道よりおらふとて口が苦味のお老さん何様と  
くせらう老一左様お人風が随くきくあらうてなこら  
らお鳴りも運でいませうナヤモウ望矢さぬが両方の  
へお運入あすらく初一丈あるサアお花の来るとたまらうと  
個様様を汲て船に乗後まじる出の隅の方へ除て  
くサアくお方へ入ッお火桶の火もお公がすらくと  
ておきやうお初おらやア左様とお公お山吹いて







異ころウハ<sup>言</sup>且<sup>言</sup>形<sup>言</sup>ころさり<sup>言</sup>取<sup>言</sup>きま<sup>言</sup>う<sup>言</sup>とモウ<sup>言</sup>酒<sup>言</sup>ぐ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>  
せんが<sup>言</sup>少<sup>言</sup>入<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>て<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>せ<sup>言</sup>う<sup>言</sup>る<sup>言</sup>光<sup>言</sup>ヲ<sup>言</sup>モウ<sup>言</sup>匣<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>且<sup>言</sup>形<sup>言</sup>の<sup>言</sup>南<sup>言</sup>が<sup>言</sup>  
う<sup>言</sup>ば<sup>言</sup>言<sup>言</sup>樂<sup>言</sup>さん<sup>言</sup>ハ<sup>言</sup>方<sup>言</sup>の<sup>言</sup>通<sup>言</sup>り<sup>言</sup>音<sup>言</sup>体<sup>言</sup>ど<sup>言</sup>り<sup>言</sup>最<sup>言</sup>祥<sup>言</sup>ど<sup>言</sup>何<sup>言</sup>の<sup>言</sup>か<sup>言</sup>の<sup>言</sup>と<sup>言</sup>  
い<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>ち<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>や<sup>言</sup>ア<sup>言</sup>速<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>定<sup>言</sup>入<sup>言</sup>福<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>ハ<sup>言</sup>情<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ゆ<sup>言</sup>う<sup>言</sup>廿<sup>言</sup>今<sup>言</sup>の<sup>言</sup>下<sup>言</sup>に<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>る<sup>言</sup>と<sup>言</sup>  
か<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>船<sup>言</sup>の<sup>言</sup>早<sup>言</sup>う<sup>言</sup>ご<sup>言</sup>ご<sup>言</sup>い<sup>言</sup>や<sup>言</sup>す<sup>言</sup>お<sup>言</sup>一<sup>言</sup>丈<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>せ<sup>言</sup>も<sup>言</sup>そ<sup>言</sup>ぞ<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>い<sup>言</sup>  
オ<sup>言</sup>ハ<sup>言</sup>今<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>せ<sup>言</sup>明<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>と<sup>言</sup>が<sup>言</sup>多<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>晴<sup>言</sup>く<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>り<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>い<sup>言</sup>と<sup>言</sup>子<sup>言</sup>お<sup>言</sup>た<sup>言</sup>氣<sup>言</sup>が<sup>言</sup>  
異<sup>言</sup>つ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>う<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>く<sup>言</sup>ん<sup>言</sup>と<sup>言</sup>簾<sup>言</sup>の<sup>言</sup>下<sup>言</sup>う<sup>言</sup>う<sup>言</sup>顔<sup>言</sup>つ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>し<sup>言</sup>や<sup>言</sup>彼<sup>言</sup>等<sup>言</sup>此<sup>言</sup>等<sup>言</sup>を<sup>言</sup>賤<sup>言</sup>  
金<sup>言</sup>を<sup>言</sup>り<sup>言</sup>お<sup>言</sup>い<sup>言</sup>維<sup>言</sup>ぞ<sup>言</sup>取<sup>言</sup>け<sup>言</sup>て<sup>言</sup>金<sup>言</sup>を<sup>言</sup>取<sup>言</sup>け<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>異<sup>言</sup>ヨ<sup>言</sup>引<sup>言</sup>と<sup>言</sup>い<sup>言</sup>不<sup>言</sup>替<sup>言</sup>も<sup>言</sup>

彼<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>り<sup>言</sup>て<sup>言</sup>浮<sup>言</sup>沈<sup>言</sup>を<sup>言</sup>も<sup>言</sup>と<sup>言</sup>不<sup>言</sup>替<sup>言</sup>く<sup>言</sup>喧<sup>言</sup>す<sup>言</sup>か<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>お<sup>言</sup>花<sup>言</sup>い<sup>言</sup>せ<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>不<sup>言</sup>  
面<sup>言</sup>を<sup>言</sup>つ<sup>言</sup>け<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>十<sup>言</sup>人<sup>言</sup>が<sup>言</sup>派<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>て<sup>言</sup>来<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>と<sup>言</sup>可<sup>言</sup>也<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>彼<sup>言</sup>等<sup>言</sup>ハ<sup>言</sup>  
喧<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>光<sup>言</sup>も<sup>言</sup>知<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>ず<sup>言</sup>も<sup>言</sup>ド<sup>言</sup>レ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>い<sup>言</sup>ひ<sup>言</sup>て<sup>言</sup>顔<sup>言</sup>突<sup>言</sup>安<sup>言</sup>ん<sup>言</sup>折<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>併<sup>言</sup>の<sup>言</sup>  
潮<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>人<sup>言</sup>の<sup>言</sup>僅<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>船<sup>言</sup>を<sup>言</sup>二<sup>言</sup>三<sup>言</sup>回<sup>言</sup>離<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>し<sup>言</sup>け<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>ば<sup>言</sup>晴<sup>言</sup>ま<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>し<sup>言</sup>め<sup>言</sup>に<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>  
その<sup>言</sup>容<sup>言</sup>ろ<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>身<sup>言</sup>の<sup>言</sup>年<sup>言</sup>齡<sup>言</sup>四<sup>言</sup>十<sup>言</sup>餘<sup>言</sup>り<sup>言</sup>の<sup>言</sup>女<sup>言</sup>の<sup>言</sup>髪<sup>言</sup>を<sup>言</sup>蓬<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>振<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>  
た<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>が<sup>言</sup>水<sup>言</sup>の<sup>言</sup>心<sup>言</sup>の<sup>言</sup>お<sup>言</sup>り<sup>言</sup>と<sup>言</sup>い<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>人<sup>言</sup>顔<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>を<sup>言</sup>是<sup>言</sup>を<sup>言</sup>の<sup>言</sup>ぐ<sup>言</sup>き<sup>言</sup>て<sup>言</sup>「<sup>言</sup>お<sup>言</sup>い<sup>言</sup>  
く<sup>言</sup>その<sup>言</sup>船<sup>言</sup>ヨ<sup>言</sup>来<sup>言</sup>け<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>異<sup>言</sup>ヨ<sup>言</sup>引<sup>言</sup>と<sup>言</sup>い<sup>言</sup>は<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>ら<sup>言</sup>う<sup>言</sup>あ<sup>言</sup>ぞ<sup>言</sup>お<sup>言</sup>花<sup>言</sup>い<sup>言</sup>ぬ<sup>言</sup>れ<sup>言</sup>と<sup>言</sup>  
催<sup>言</sup>ち<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>可<sup>言</sup>也<sup>言</sup>と<sup>言</sup>い<sup>言</sup>ふ<sup>言</sup>昔<sup>言</sup>さ<sup>言</sup>ん<sup>言</sup>早<sup>言</sup>く<sup>言</sup>見<sup>言</sup>け<sup>言</sup>て<sup>言</sup>お<sup>言</sup>花<sup>言</sup>い<sup>言</sup>











入て竟えそこお蔭ふ死ゆせだお蔭ぐこのお情で助うこの  
海ふモウ有ぐさうさなのみたにりひうけく俯きさく七巻  
あまを騎して物もいそだわりけりあぞこれに何あり浮き  
うくまぢや此向川岸うまこ海軍の川岸ありと何如でも  
着てやるから徐く定ぬん移人抛りお影まるとア非たうと  
のと人ども女の面合せに俯てぞ影うりけり  
移者回くこの女の別りのお影あり守経ありと食恥ふ  
抛りお影きて川水の眼只透りく気が付て大くさなれと

おのなるのそ程改くの文に替へ

第10回

せんとうあうあう  
船内二人の勃然としてこまにサ何程一なんどる挨拶するせん  
お二おあ方が死うがけ生やうが此方の構つて秋ぢやア物か降り  
あまを騎するをするかう思ねがさの毒がうて依けておれと  
おの影くく影してお影をうておるこどもう吾們とまの柳川  
岸で逝す知ぐ定どくおの影お何程に移人ぢやア船方  
おの影くく影してア何如人影るこどもうお影く移人を影がこれ



アア元の通り折込で仕舞せしめ女の人ぞ人ぞ人ぞ  
玉極止尤私も何れやうたうと考へざるませんうらま  
で、そ云て指りましと船に「お前の沈吟の付まをみやア此  
方の船が川岸へ着るまで麻としいサア何れするト一發  
高く張あげをを花の波で吐やく機を注して指り  
らうふき根ふ苛くりをばらもとりぬ心ふ襪の方へ靴  
突出して被女を夜目あのおまど桃灯の火氣ふま  
院くりん尚め花「アアお前の様さんぢやアあいのしおん

んお遠ひあのトりのまとして女の靴をあげりんにあまあん  
ふ方あまお花あまど怖りし更み言わも物まこそいよく  
渾身で寝のすめり雪下お花のま如へま出た「おあ  
あつて何りのことと委く笑ひくと毎日のゆうふあつて  
が信心ありふお出ごといのまを一つあつての「アアお令で  
おあ業を欣してお長うエ勿福壽命のお禰紳でも給方  
あいつらあまし「この音傳が此方へ来るこの日の呪方煮お  
死ごといのまお花してつるまどが吊ひや泣きふ團らう







是水の空きも何如人やして顔み流きて玉の汗て云ま  
るの答人もあつくともあつくして花くつりしが花あけり  
るお花が物を突然身を伸て突を合却み再び川へ  
飛入りし縁ききんとおりたる所力不掩ひらるおれり下  
の是お穢まり穢まりの自在あり物を流ぬ沈ぬ愁  
ひ水の涸げらどけ苦くもたまも天の罪累の満ちて  
死しらるぞ悪の報ひと知くもけるおあのお花が乳の  
とを強く突きて突きて突きて突きて突きて突きて突きて  
突きて突きて突きて突きて突きて突きて突きて突きて突きて

をを狼狽驚く船中一回初お花を遊りお花が乳の  
性稀人船公婆アを捕へて其んなころお花とてくお  
花さん體りあせ人す一云へど答人も息く入て穢れさ  
へ淫場まど初め弁の有漏くして出るまア六々お  
光さん何の葉の有り人光吾儂もまを搜して花のどが  
天憎今日忘れて来て。アお花さんお花さんが大方持て  
花守すならう。お花さんの紙入の今此如て見て  
花の何れも稀人光「懺り掛守りお在る」答とお花の懐



申すを守り袋を取出し繩の紐を解き申す物を  
撮ると出し又うきうと振る紙すく轉び落る丸茶  
に腹の穿つけの相業りとて縁て知りしるお光のたびま  
サア早く水をお異とて啖て馬楽の茶碗を持ち「水  
別ちけぬお存りやすおんあう欣してそつて異なると  
言へばお光の丸茶を能く嚙くごいてお花がばへ水緒ともみ  
吹らぬおえ未お勅お突れしるの息の絶べき程あう縁  
おをぬふの哀しさとお勅をてくる悔恨さふま終る

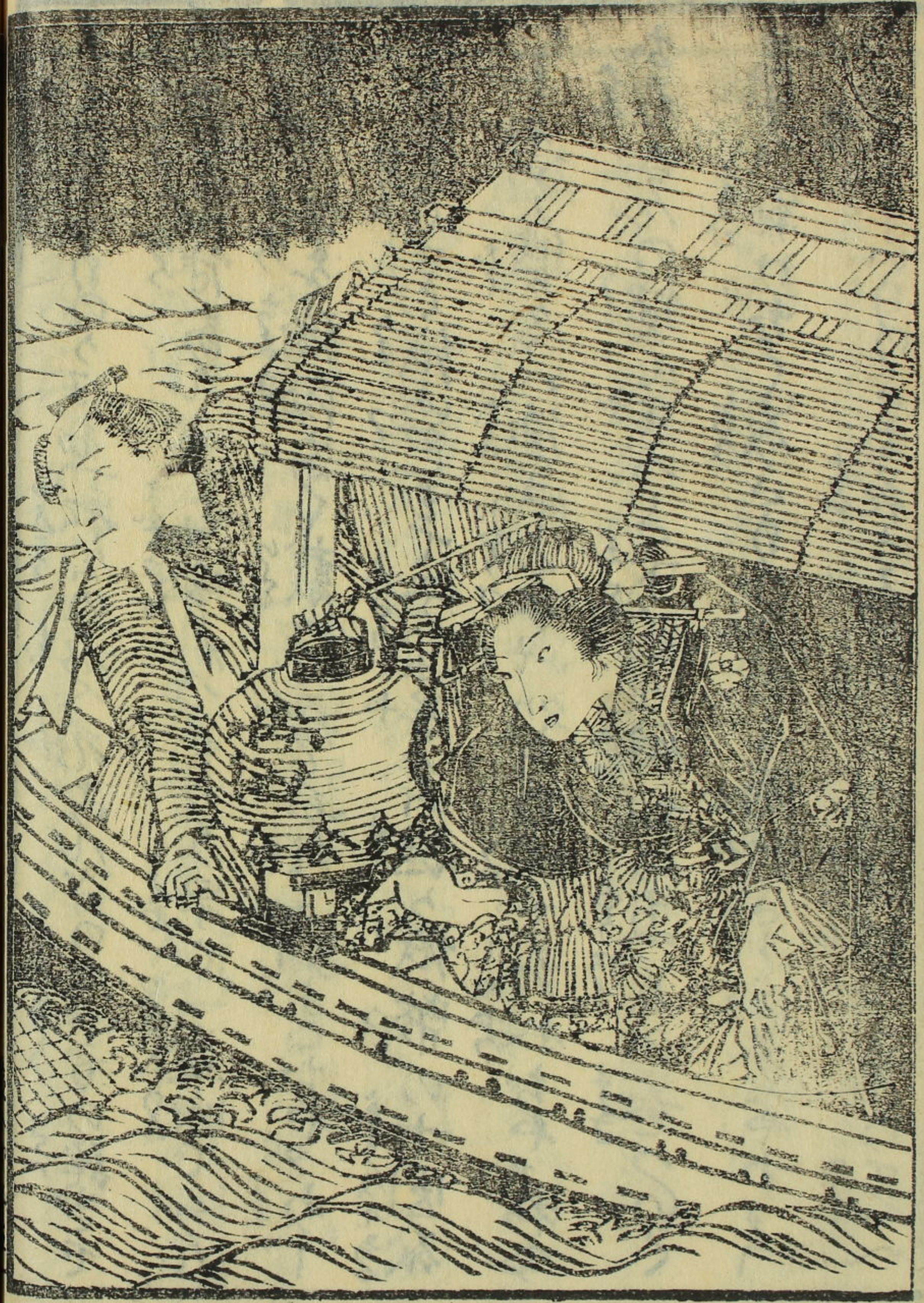
らうの夏ある故茶の利目著うくお花の忽地目とて花の息  
吹かすお命のたび初「お花ををまうりしとるるがけ光  
何程おん家か付しう人花「有難うとてお見えまへ「ア川  
らとてお婆々アの迹で仕舞ましとて船中「何迹やアおま  
せん婆々アが川へおのるとおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ  
潜つたり浮たりして捜しやすうち婆々アのりつろおぬおぬ  
と改名して。アレ波除杭おぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ  
透して指しおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬおぬ



ア 外らまこところしめんて怖りしましと知<sup>せん</sup>まア能<sup>あ</sup>き我<sup>わ</sup>落<sup>お</sup>つ  
お人<sup>ひと</sup>おやア早<sup>はや</sup>く快<sup>か</sup>くあし移<sup>うつ</sup>せ光<sup>あき</sup>「突<sup>つ</sup>ねと所<sup>ところ</sup>の何<sup>なに</sup>根<sup>ね</sup>ご立<sup>た</sup>立<sup>た</sup>  
らぬその子<sup>こ</sup>を最<sup>も</sup>あんとも有<sup>あ</sup>りせん結<sup>むす</sup>りある度<sup>ほど</sup>で食<sup>く</sup>さん  
てお縁<sup>えん</sup>がせ中<sup>ちゆう</sup>しておまの毒<sup>どく</sup>さるでどおのます光<sup>あき</sup>「まの西<sup>にし</sup>み  
おまの持<sup>もち</sup>て居<sup>ゐ</sup>る丸<sup>まる</sup>茶<sup>ちや</sup>の能<sup>よ</sup>利<sup>り</sup>移<sup>うつ</sup>く下<sup>した</sup>取<sup>と</sup>散<sup>さん</sup>しる守<sup>まも</sup>りのあを  
えの如<sup>ごと</sup>くお家<sup>あや</sup>人<sup>ひと</sup>納<sup>な</sup>め光<sup>あき</sup>「天<sup>あま</sup>悟<sup>わ</sup>吾<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>が葉<sup>は</sup>と忘<sup>わす</sup>れてまを  
のでおまの守<sup>まも</sup>りのとて出<sup>で</sup>しとのごお花<sup>はな</sup>「お花<sup>はな</sup>久<sup>ひさ</sup>吾<sup>われ</sup>娘<sup>むすめ</sup>ア世<sup>よ</sup>  
も知<sup>し</sup>らぬあんとく「死<sup>し</sup>んであまうと人<sup>ひと</sup>ふ總<sup>すべ</sup>婆<sup>ば</sup>の度<sup>ほど</sup>が知<sup>し</sup>

是<sup>こゝ</sup>てなまるものう子<sup>こ</sup>知<sup>せん</sup>お公<sup>こう</sup>の如<sup>ごと</sup>く赤<sup>あか</sup>あんとごの世<sup>よ</sup>の終<sup>しゆう</sup>ぎで  
世<sup>よ</sup>も言<sup>い</sup>ふ付<sup>つ</sup>あんとごが命<sup>いのち</sup>をわくさうう早<sup>はや</sup>く一<sup>ひと</sup>盃<sup>はひ</sup>飲<sup>の</sup>んでらん  
移<sup>うつ</sup>る如<sup>ごと</sup>く「あを除<sup>と</sup>際<sup>さい</sup>あく敷<sup>し</sup>いて居<sup>ゐ</sup>るおれ知<sup>し</sup>れまおやアわい  
だがお春<sup>はる</sup>ごとと紙<sup>かみ</sup>の包<sup>つつ</sup>して二人<sup>ふたり</sup>おさるの遠<sup>とほ</sup>う紙<sup>かみ</sup>幣<sup>はひ</sup>の十<sup>じゅう</sup>圓<sup>げん</sup>紙<sup>かみ</sup>  
べしお阿<sup>あ</sup>の婆<sup>ば</sup>の如<sup>ごと</sup>く「おまの如<sup>ごと</sup>く手<sup>て</sup>に此<sup>こゝ</sup>の川<sup>がは</sup>で死<sup>し</sup>ぬおやア移<sup>うつ</sup>か  
お花<sup>はな</sup>さんの貸<sup>か</sup>てまうと下<sup>した</sup>おが被<sup>お</sup>奴<sup>な</sup>の友<sup>とも</sup>はお巻<sup>まき</sup>ついで  
あまの動<sup>うご</sup>けなく成<sup>なり</sup>このんどかう溺<sup>ひね</sup>死<sup>し</sup>とこところえやすま  
ホニ三<sup>さん</sup> おろしめのごお花<sup>はな</sup>さんの葉<sup>は</sup>ののが被<sup>お</sup>婆<sup>ば</sup>アさんのごへ











然る言まうしけきど最魂魄ちちつみが落おちきまたり  
平常つねの通りみ成り候なと若旦那わかしらや金さんかねさんのお蔭かげで  
款くきとあめ彼の女の身のあつ果はをいん届とどまりて情なさけあ  
睦なごみしうはないまへト昔むかしあつけ悪わるきにつけまうしあひ  
出でるおの事こときま病やまひを癒いさんと縁ゆかりしうとが仇あいつと  
あり却かえつし命いのちを縮ちぢめし此男このおとこのどしぬめりし報こたへ  
あき不孝ふかうの罪つとめ悔くみとと信こゝろれさん物ものあ隙ひまと涙なみだの  
雨あめふ濕しめる眼めえも愁あはれ然ぜんくう光ひかりお花はなさん一ひとつ涙なみだど

徳とくる不ふ裁さいきませうう子こへ初はつ大おほを強つよく成なつこつ老らうもあ  
特とくきでも何なんどろろ気きが晴はれやうろとあひまけんうし  
一ひと盃はち飲のむ一時ひとときあ晴はれ二ふた盃はちのあを日本にっぽんをまこ二ふた盃はち  
二ふた年ねんせう口くち盃はちのんごうに方あた八はち面めんづくまる地球ちきうの  
あやつり浪なみ塗ぬて轉ころんで天あま宮みやをふりてさきと遇あ  
たい今日けふのあひの地ちをせん一ひと歩ありまけんヨ光ひかりヲをまう未ま  
ころう王おう様さま様さま人ひと着あく船ふねの音ねギイ引ひおろろ恩おん行ぎやうが  
河が岸あし通とほりて流ながる声こゑで吟ぎんどり詩し



りやうんのもんせのあつてどまうだけのもうすをよすむんちゆうめい  
兩岸猿声不啼停輕舟已過萬重山

淡西曙第五編卷之中

春色淀西曙第五編卷之下

東都 松亭金水編次

第五回

夫人とて大なるを有べか人懐をんを有  
べりて大道を渡む人懐をくも人懐を取まひ大  
道ゆれず何きをたれ何れを捨んやお花の一人  
香煙をの二階のを指み力を情け襟ふ願さ  
込の思案ふあまる満息はき拍の終をを長屋宇



の煙管の先を推しながら心の内をほくぐとさび煙の  
社す糸道りこ「何根し」因果う幼稚い時うさふ降  
りたる仕合があらて却つて不仕合慈母さんのお影  
ふす方が紅葉にあらうと春うらぬ父さんの長ねひ  
根しこものともふうち二葉なとちふ大家の旦那が  
其一人子の娘ふられとて許嫁せし縁み固りあるの  
世帯のき厚くて氏なさまおの子の玉の薬とるの生  
さきとねむきて嫁しいるもなく親父さんはんの親ま

で亡人と成りていまも持てまうけりしうさふの  
婿の盃まをしこ二入の中こそが襷袢の書附由  
持て弄るよと渡さきててんまが今さうう及たふこれ  
お怒りの前の仕合がなまう何根して勿作りの  
み障りころ初め宛さん心どてあう標致あらき日  
稼ぎのお方ありろ彼ふお人とま嫁ふふまをば  
さうりても厭そぬと増して大家の旦那旦那外お女の  
そのやうにうらう十まを筆を附て可むがうてむさ



るを何程して徳さふ程くもせう一日お目あう  
ら程を今日のお出が何故かのと苦勞で苦勞でお  
版も平み給おが姉さんさうお風でもおあひ引さう  
と伺はる程の表しい人お肥まを優しくさせるとの冥  
かお降つと社会あまこと其社会が身を苦しめ應と云  
へあの不社会絆嫁の壺をあことこの世と云う程あ  
り知もぬ男に義理とて義理ある人お義理と欠  
く浮世の義理との此事々嗚呼何程あさう空らう

とあひ塞る程のおうう階子の隙を忙しく登るの  
此家の女房ふても摺の取人程と出し一桑川かろ  
はぐ掛とヨ大方若旦那ぶらうと男おワた一昨日向  
島人程お出あさうて啼りぐ進く成とせ人う昨日  
のあつえあさうなんどうと吾儕も左程ごととあひ  
またりと影さぐも住夜せ程しく身振へをぞ  
あつあつあ

○愛あなみの鎌倉の粹と通しを輻湊なり



水の流る細けきと浮世の夜暮と一洗して冥化  
み靡るに青柳河岸の稻を斜めに横へ入り響  
と避くる楼の奥の二ト扉の是するつち彼の桑川の  
別室ふて二種三種の音をあふん徳和の袴いら  
あけけきと客の美形を自墮落る初め糸のお花  
みぬひ知る日わりのう二生熟命ふ成ておあのを  
答とせうと思つとかく一昨日の初め船の帰らけ  
ふ腰々アの一併や何うの有うそ飛馬楽と一ふ

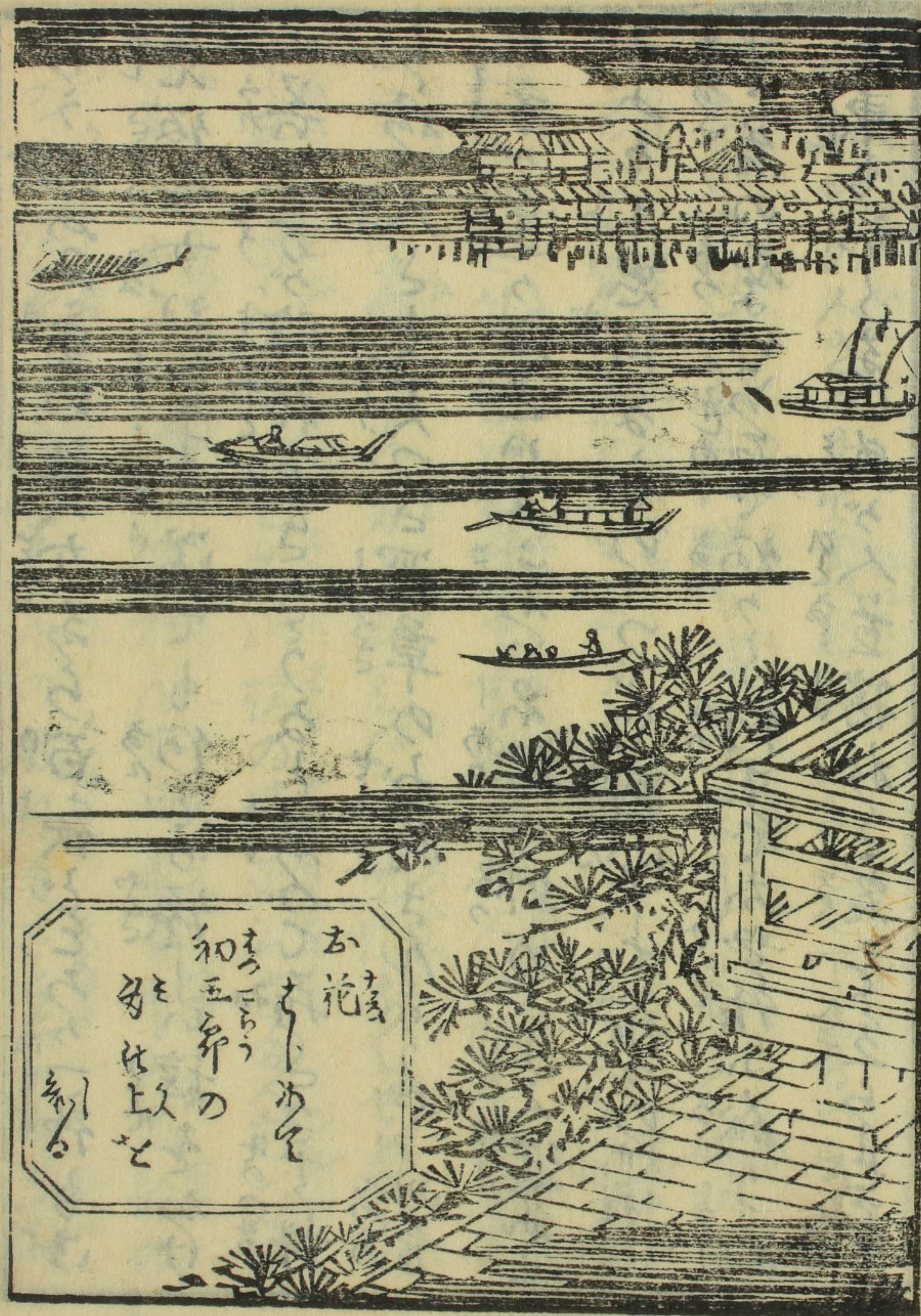
昨日出て来る物米あふとぐすう用の有とので慌悴  
馬床で外一人で出て来とおあを迎ひみきつこの舟  
たホニ一昨日の晩のあひもあまの者と船へ引あげ  
吾儕の悔恨の念ハ晴しませが諸らぬ事と時  
係るお間入りやおあものを入りを掛け何う何まで  
穢れを解うきたいたまた知しあふ附ちやア船公あま  
うせ何程うせざア成るゆえにうあう何まで海山  
ととあひましたワ初とととともせ方が幾々アと河へ投



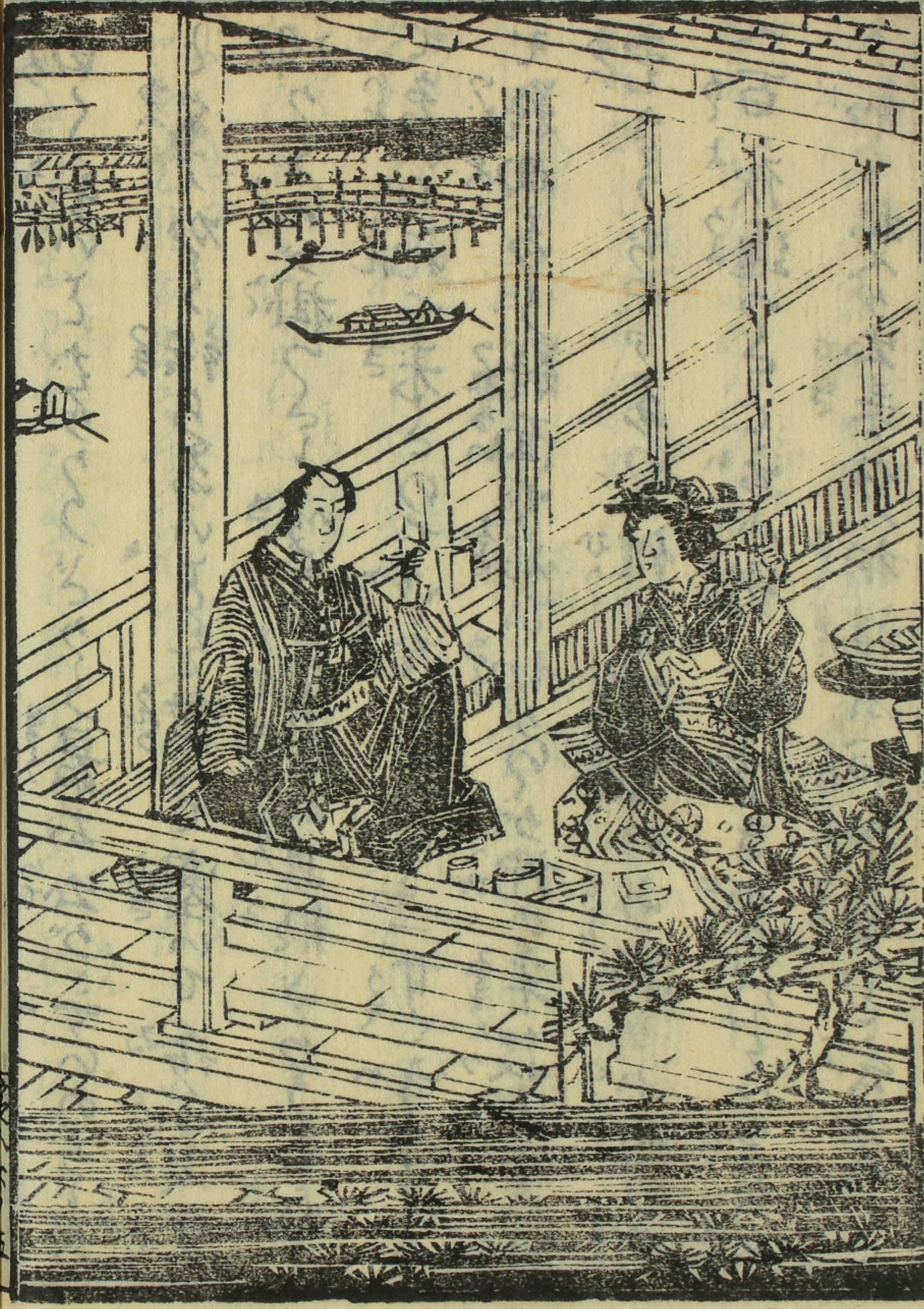
うんごといふ候ぢやアあ、扱あつかりぬまぬまこのヲ取とけて  
きうとあこのグ死し込んで死しどのどかろ何なにまへ届と  
けりふも及およむだ船せん公こうふは塞ふさげと云いふ候こうもそん  
く〜彼かれで宜よろとすれば彼かれでも宜よろのサ花はな「まふ作さく日ひまこ  
世よむらう禮らいを〜て密ひそま〜た日ひ初はつ「开ひらきやア宜よろうのこ  
自己おのれも持もちぬらん心こころ附つやうと云いふらるる病やまこのど花はな「咲さ  
口くちを是これ非ひお出いるすつて下くださるうと云いふドて病やまりま  
〜このふおんえあきう〜なかつ〜う〜物の彼かれの〜廻まわ

白しろく〜雲うみの〜とむらうらうどろ〜最まお出いが〜雲うみの〜ら  
と夕ゆふノ〜から緒つならあいのとを壘えりへて塞ふさいで病やまる人ひと衆しゆ  
川がは〜〜にグ掛かつ〜と波なみき大おほ方ほう若わ且かつ船せんぞりうと云いふ  
て多いい心こころ死しを未ま〜こので〜な〜またワ初はつ「甘あま〜云いふせりり  
そ難い面めんあ〜難い面めんでぬひ切きらぐ蛇へびの半な和わ〜と云いふ可か  
あ〜さうぢやアあ〜い〜性しやう若わ深ふか草くさの少せう将しやうが小こ町まちの所ところ  
へ百ひやく夜や通とつ〜と云いふ影かげ〜と波なみき小こ町まち〜らるる英えい女にょ  
う知しる人ひとが出で来きぬ人ひと相あ談だんふ百ひやく夜や通とと云いふ〜のど





お花  
 五郎の  
 母は久  
 刻





らう向ふふまの移人女あら百秋どろろ一夜由  
免取公女のこと平二歳でも何とも優し  
て異る方が附程重ささうると名つて居る  
ら移人ごとと笑つて深草のか将さんよりやア此方  
の方が遠うふといまゝ名按の外のこと人迷ふと  
かよふ不思議なものをトつて感心して居るの  
半君の厚いお飯で何うも何までお世話ふ成り西  
も東も知らぬお力か人並務れと名を立らせ

屋敷宿の人さん身を具負ふあまつて下さるい  
もあの世恩のお蔭健も浮きあはまてかゝる被  
お方のお例お居て一日ありと尋して居ると女  
志寄れを集まひお中すおのふ人ふ胞身で  
お世話ふ成るといふお名もぐと物作あくせめ  
半君のいせとと大川橋の清正公さる人自  
性もぬきおけつと頼んで日々もやぬお礼の  
心の片端も絶えずと火の物終も半君のお







勝美の祝があり半殺しあるは挨拶をいって飛つて  
中袂の道を破る死の二つと覚悟のきめても極るぬ  
決意と云ふが再び初め「お前の除きぬ祝と言ふの  
へいつの歳に婚烟の誓まぐあくと二葉屋のねめ舟の事  
どらうが夫あつて自己が主人小とらうが籍しと志て  
と波て怖りお前の誓をあげその二葉屋のねめ舟さん  
と平らねどらうしておねとらうだ誓を違ひを初め  
齊を笑ひ出「二葉屋のねめ舟と云ふは自己の幼稚

なすあち自己二葉屋のねめ舟と云ておねを  
まご怖う「誓あつて平らねが二葉屋のねめ舟さん  
でさねいふんとらう并して吾儕を扱め時の花と云ふを  
係してまアト「おねと云ふ時指のよを走つて通る人  
カ車の音ガハラシガラシ

第六回

和「自己の慈母うらおねと云を志とらうや扱めおのと  
又後のとも「おねとおねさんへ彼のよを連れて田舎人引



えんごしりみくろり夫々何種あるすくうと折々の時さ  
鳴り出にふあか門跡お出く自己が本念を成せりこの時の  
ままふお母と二人を孫と申さき虫が舞らせこの方一  
夫でいふいと心くか馬あふ容をいせるといよく  
夫の極心持うと板守おきせとあう殿の始末  
く？に女入出つぬふとと云うく実西を探るふに折  
互と名い馬楽と一ふ尋ねて未とせ話をあやうと  
あふと一年待との断るを憐憫心をつけてあふの折

状を窺ひ思はうらを引て見ても何分西縁がうらうすと  
わろきあふ浮気して孫の守らるもいえずあふの  
女が雅いとき許嫁とてお花さんで其おのとき守  
つて孫の少く世系おらる貞節どか何人けりあふ  
もせぬ男のあふ其情をさるやうな古風な事もおま  
い何ふあふも長い日お確守る紙が舞るうらうと一  
へでんの中にあふも待て甘家の日おあふお船て度り  
の隅田川一畝日の夜の澄ぎの時あふ茶を飲せり



とて其の持守りうう業と出さうとぬこときふ夫  
それと撥げ紙へふさる形が押てあるかしく紙の字が  
み徳をえると自己がふあふ出ると書附志りも実父の  
自筆ゆゑおんふく此方の監之通り女房のおれに  
有うとふ人はいよく書つうふいふあふ生の附まを  
始あふ猪つて心の苦さかうふふとの障て湧くもふ  
前と自己ふ刻合せるふあふの意母の導びきてもあう  
うと持をるふ嬢しく花をかうふい思つてかき川と縁

定て其教を賜り略日を馬来ふ附まとなれ後出を  
びねとやう表し今とあり自己の女房とふと判然  
と知きてりりやア人ふ取持と持おふ由及む却つて  
強密しと解しをぬるに邪ふ成りう馬来の  
未だ人うらふとゆつて夫て此根ふ早く未だこのサト  
ておれい今ふ小愛あうきえなし解ふ斗り家裡ふ  
おと命と人おのああう情うじと惚て孫がう恨  
らまぬハおと邪とふみ祥嫁のぬる板ありしお松



めがけが矢張り張喉と初め糸の幼雅なと啖て焼く  
融じさふ只のちづくといひ隠り暫時とを由せりしが  
「夫あしアノ早者ガ一茶屋の杉の糸さんでいけのま  
しう開く一他日の晩の猶ぎふ彼の書附とそ君  
みお見らと申しよめは社務のちり煮母さんの名等  
さて貴君ふけ候ふは是くのちをいせませう始り  
くう其車う知きて弄くうそ君ふお暇とせせせ  
す吾痴も附係な若方へ志すい夫不附ても何れと

平家入江戸屋の本家へ初一本家の煮母を玉金へ  
そらことりちふ自己の嘘の煮母が自己を退し自  
己の生二の煮母の家へ往てわうて弄るうち被扱と  
ちんぐみてふ江戸屋の家へ貫りれ性且まうの一伍  
一汁をさばり不味しとちん状ううう男の不仕合う仕  
合ふあり二つをなうううんを百倍の身代志し今の  
親父めい煮母ううしてまふ大恩を言て弄るのサ  
夫てふ大方中名のおりん合ふあるお娘さん有の



ては舞のまをうたふ人候とありしおのまうた王定めてお  
買しふるをうたひのませうん「江戸屋あは娘の初今  
あふ買しは舞妓の女房が有つて美ふ美しくく一  
寸おあふ遇せ振よと云ておしなれを名込と可や  
何卒内目みからせて下さふナ初「今お目みからせま  
すトふれが紙入をとり懐中鏡を出して太花の初を  
うじ「カア見て異々自己の才答ちやッ心くそと云ひ  
標致と云い「世界めも二人とんふり」と云ひれ

のどおアレまア悟らしい初「までも今まをプク「振付なう  
因縁と云かぢうたうをあのまのどと云くして保と  
うけらかしくお花アレ方根ぢやッ有りませんが何ぢうまが  
様まはううサ知「常候にあき舞妓の女房と極つと  
んまは片時も初「若ちやア並れ初人と云て今並に  
内へ入まて女房みなる候あも性あ人と云ふ時隔の  
唐紙ひきぬけ「オット大性くと云ひッ馬床が案  
内あて「江戸屋務右あつ入りまう「知不「初



片の影をさし人小退りて情を病む務を未つの掌姫  
克くやく筆をひみ及むぬ実の世に初め命が除り  
小尻の病ちぬ故内証で馬車小容子を噴く青  
柳河岸のお花と云ふ花妓ふまもどとの影一何  
ごうまごうの栞ごう次才小因つら自こが筆寄  
殺ふり中を附てまうと云つて此隣り花女へま  
ふると二人が先くうはの影一おとを匿けと身と  
澄し波をまきくぞと神妙なるけむ初め命が花と

花嫁の盃ををまことと云ふ影の初め麻くお  
めて委細の志をうちして病けはともお花と云ふの性  
へり知れずとの事ごうが彼栞して再び廻り遇ふの  
能く深い縁でもありサ夫小附ても初め云ふべきは  
有る縁で影して噴せと通り二系をくく二万文借て  
立寄るとは戸屋の身代予知でまのるも別六と云ふ  
そして古禮文の懸合くく殺を突りく館を出しお  
喉の別六らの栞もくくの罪を罪一のちちを磨み成く

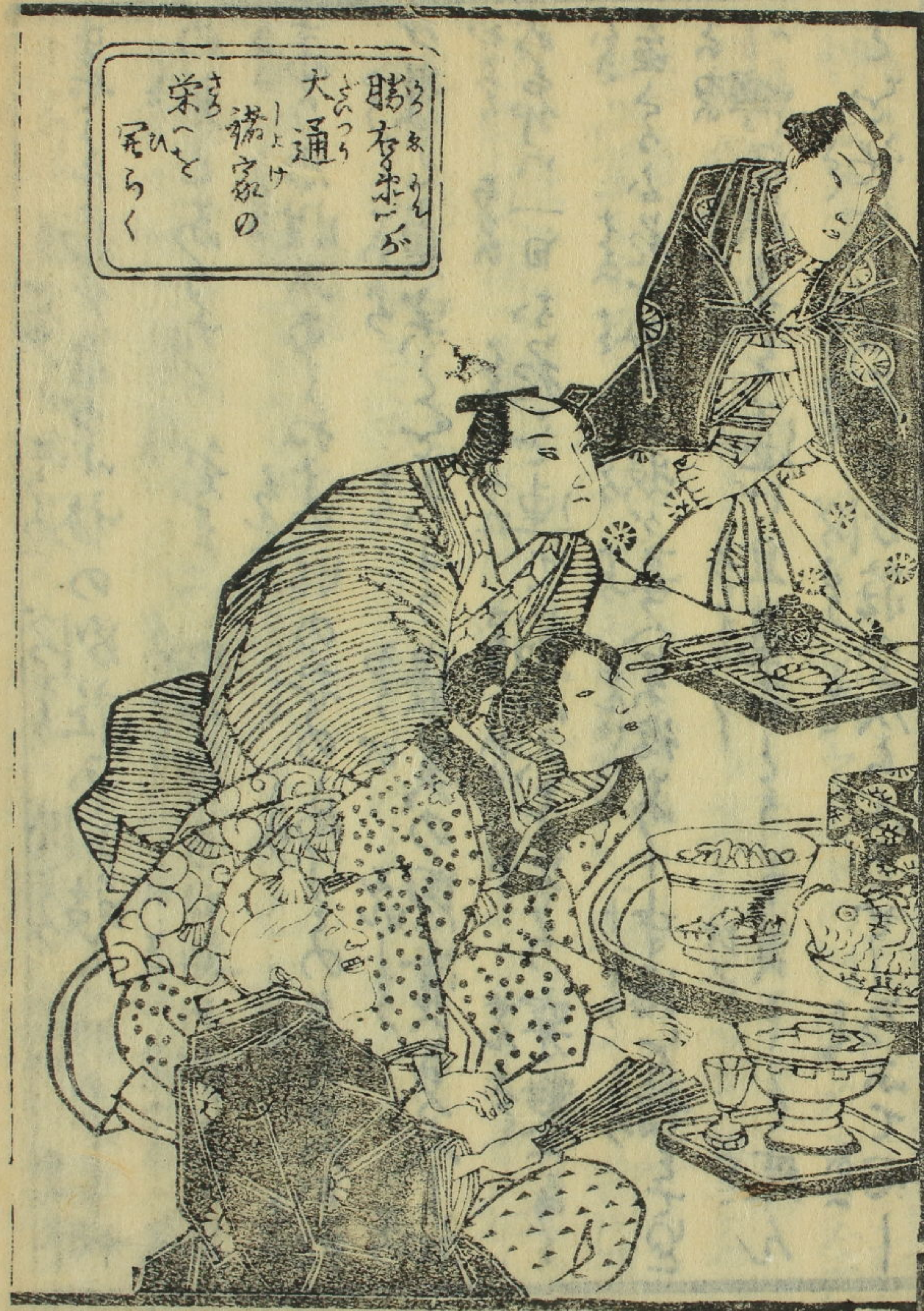


死んごととつぐ二葉屋の家を再興の持節とうらの附て  
いひ彼をいひ方から二葉屋人二万支かめて是まで  
初めて是れと慥なる者を支配人あり預けは二葉屋  
を赤花の里とて初め仰と配偶せ二人が中の子を以  
て二葉屋の家智人と定むべし赤阿瀬川町の赤花  
おん母が母お初め仰の為あり母方の祖母ありを二  
葉屋の女に引くは其の女婦と為まん又二葉屋  
も自己の地面の田めて是れ紀人をかき待合葉屋の株

が賣りのお女このと買て是れとうつはむあめ地の藝  
者のお光とてやうが振替て居て是れとて夫を取  
り持て是れう女房ありて是堅きまみふふが返ら  
うと流石お輝の傍にお居るが何れも物まを置くか  
あまきとありとてうひみ初め仰お花のえ葉馬木の葉  
ひた方ありず此目一回あ様の酒宴お事おれ  
備その翌日より馬楽が周旋めく香度屋の方の  
掛合すとお花の一下見り二葉屋の見世のおある



勝を承べが  
大通  
栄  
栄  
栄









妻と定め其日より義史深ゆく流石の身代を獲る  
つらまゆん ころめづらき ちか 連れ けんきき  
猪右衛門の小梅の別荘へおちて連て隠れせし其後  
おち ちか 玉の如き男子を想する故  
ころめづらふん ちか ちか ちか ちか  
初め神大りお收び猪右衛門をてて夫と自己が夫と  
ぬ ころめづらふん ちか ちか ちか ちか  
おし原の身と号けし又其力とお花とが申出来  
し由男の子ありける故猪右衛門をひて之と二系  
屋の家智人と定めけしをてて家とも血脈を以て相  
續し初め猪右衛門とお花が申へ出来し此の男のま

お花の犯ある様屋流八の家とも最後大ゆて建  
させしり徳馬床の樂屋と改名し美死人を謀し侍合  
おちや ちか ちか ちか ちか  
系屋の見世と株と猪右衛門のつらまゆん  
ず彼の権振の辨別をさしき柳川岸あるお光を女  
房にお貴ひ文婦様し文者の果とく人愛相もく  
づらまゆん 別荘の元来遊くと入り来る客お日橋の  
繁昌は是れ男の子を儲けり然るに悪とあり  
しる二系屋の女房お堅伴頭流八および別六お



婆の食を放するをいふ食とありしる人各非業の死を  
 をいふ一人の徒に死を始め初め馬未まを男を  
 女もまの子を殺し家を栄へて福ひの候未るを  
 正道を守とるを天の貴いの人の位あるをいふが  
 此書成るのゆに娘直子と名の初めて善事としる人  
 未繁昌の僕が後合ますとうやまの例とます

淀西曙第五編卷之下 六尾



本



